

## 第 12 冊

### 『戦国茶の湯倶楽部』 ～利休からたどる茶の湯の人々～ 中村修也、大修館書店、2013年 (下)

#### 戦国大名・武士と茶道

前回では、「村の田んぼにタケノコ干本」ということで、侘び茶の三人、村田珠光、武野紹鷗、千利休を取り上げました。

今回は、茶人というよりは、戦国大名で天下人となった（なろうとした）織田信長と豊臣秀吉を取り上げます。彼らと茶の湯の関係、あるいは千利休との関係を見ていきましょう。

#### なぜ、武士に茶の湯が？

茶の湯（茶道）は、戦国時代に爆発的に流行しました。おそらく、茶の湯を楽しまなかった戦国大名はいないのではないのでしょうか。

では、**なぜ、武士の世界に茶の湯が大流行したのでしょうか？**

たかがお茶を飲むだけのことに、大名や武士たちが本当に夢中になったのでしょうか？

お茶を飲む、お茶をたしなむというのは、鎌倉時代から流行し始めていました。ただし、それは、武士が禅院と関係を持ち、禅寺でお茶が飲まれていた影響を受けてのことでした。

そのあたりのことを、中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』では、どのように考えているのでしょうか。少々長めですが、引用します。

鎌倉武士たちはこそって禅宗に帰依しました。つまり禅宗を信仰したのです。

武士の職業を考えてみてください。武士は敵と戦い、生死を争います。戦場で生き残るためには、敵を倒す強い精神が必要でした。また、自分が生き残っても、他人を殺したという精神的重圧が襲ってきます。そこから逃れるためにも、克己心が必要でした。そのためには、坐禅で自分を鍛える禅宗こそが、武士にぴったりの仏教だったのです。

しかし、生死をかけているのは武士だけではありません。農民をはじめとする人々も戦争に巻き込まれ、また、戦争に駆り出されて、いつ命を失うことになるかも知れませんでした。戦国時代は、そういう生死の境をつねに意識する時代だったのです。それは武士を相手に商売をする商人も同じでした。むしろ、武器を身につけない商人達の方が、いざ戦場へ商品納入となれば、より一層の危険をはらんでいたかもしれません。

そうした緊張感のある時代には、反対に癒しが強烈に求められます。

癒しは人によって、それぞれ異なっただしょう。

・・・自分の精神を鍛え、この波乱の時代を乗り切ろうとした人々は、癒しと同時に精神の落ち着きを求めて、茶の湯をその手段としたんです。

茶葉を、時間をかけて挽き、湯を沸かし、茶を点てて、一椀の茶を静かに喫する。

その行為の中で、戦場の殺伐とした気分を落とし、平常心を取り戻す。

それは、まさに禅の心にも通じるものでした。

利休達の堺の商人も、戦場において自分を律することのできる茶の湯を必要としました。会合衆の寄合は、宴会から茶会へと変化したのです。

茶会が流行すれば、癒しからさらに発展して趣味の世界へと突入します。豪華な唐物道具を使い、茶会の趣向を凝らして、客を楽しませることに夢中になる茶人も出てきました。

そうした中で、趣向を凝らしつつも、下品にならず、むしろ精神が癒されつつも、亭主を尊敬せざるをえない茶会を催す名人が登場し始めます。

利休は、まさにそうした名人の一人だったのです。天下人への道をまっしぐらに突き進んでいた豊臣秀吉は、利休を採用しました。採用したという表現は現代的すぎるかもしれません。むしろ必要とし、重宝したというべきでしょうか。

## 織田信長

あなたは信長、秀吉、家康の三人の中で、誰が一番好きですか？

私は一番が信長、二番が家康、三番が秀吉の順です。若い頃は二番と三番が逆でした。でも、ナンバーワンは信長です。

織田信長については、いつか書きたいと思っていますが、今回は茶の湯に関する織田信長について、以下、紹介していきます。

**イエズス会の宣教師にルイス・フロイス**という人がいます。彼が著したものに『日本史』があります。信長について、当時の日本について、さまざまなことが書かれていますが、その中に、次のような記述があります。

**彼が格別愛好したのは著名な茶の湯の器、良馬、刀剣、鷹狩であり、目の前で身分の高い者も低い者も裸体で相撲をとらせることをはなはだ好んだ。**

良馬、刀剣、鷹狩に関しては、武将ですから当然といえば当然ですよね。茶の湯の器というのはちょっと異質ですね。「茶の湯」ではなく、「茶の湯の器」というのが、おもしろいです。道具は使ってみないとその善し悪しがわかりません。その善し悪しがわかるというのは、道具を使いこなしている人物であるということに他なりません。



織田信長

ところで、信長といえば、2度の「**名物狩り**」を行っています。そのあたりのことを、**中村修也氏**の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』から見ていきましょう。

1度目は、永禄12年（1569）2月27日。京の町衆を中心に、大文字屋所持の**初花（はつはな）**茶入、佑乗坊（ゆうじょうぼう）の**富士茄子茶入**、法王寺の**竹茶杓**、池上如慶（いけがみじょけい）の**蕪無（かぶらなし）**花入、佐野の雁（かり）の**絵**、江村の**百底（ももそこ）**花入などが買い集められています。

この中で、最も有名なのは**初花茶入**です。これは**肩衝（かたつき）**茶入で、山上宗二は**新田・初花・檜柴（ならしば）**の3肩衝を「**天下三の名物**」と称しています。信長から息子の**信忠**に譲られ、その後、**家康→秀吉→家康**と行き来して、**徳川将軍家**の所有となり、現在は**徳川記念財団**の所蔵になっています。

2度目は、元龜元年（1570）3月5日で、堺で買い集められています。この時は、**天王寺屋宗及（そうぎゅう）**の**菓子**の絵、**薬師院**の**小松嶋茶壺**、**油屋常祐（じょうゆう）**の**柑子口（こうじぐち）**花入、**松永久秀**の絵等でした。この中では、**趙昌（ちょうしょう）**筆の**菓子**の絵と**牧溪（もっけい）**筆の**鐘**の

絵が有名でしょうか。鐘の絵とは、煙寺晚鐘（えんじばんしょう）の水墨画のことです。

これらの名物に対しては、「代物金銀以て仰せ付けられ候き」とありますように、きちんと代価は払っています。

1度目は京都で、2度目は堺で「名物狩り」を行ったというのです。

そもそも、織田信長が上洛したのは永禄11年（1568）9月のことでした。この時に、名物狩りを早速行っているのです。その翌月には、堺に対して軍資金2万貫（現在の価値では10億円くらい）を要求しています。

なぜ、堺なのでしょう？

当時の堺は**自治都市**であり、戦国大名の配下に入っておらず、日本最大の軍需産業都市でありました。**日本一の鉄砲の生産地であり、中国から弾薬を輸入する貿易港**でもありました。

つまり、**軍需産業の顔役たちを手なずけるために**、信長は堺に「出向いた」のです。彼らのほとんどは茶人です。信長が名物を集めるようになるのも、座敷にそれらを飾り、豪商たちをもてなすことで、良好な関係を維持しようとしたのでしょう。

さて、信長が堺を包囲したあと、どうなったのでしょうか。

千宗易（利休）ほか堺の商人の意見は分かれますが、結局、翌年1月には降伏し、信長は堺で「名物狩り」を実施しました。

茶人たちが大事にしていた唐物の花入や茶入、趙昌（ちょうしょう）、玉潤（ぎょくかん）といった宋代の画家の絵などを出させ、買い取るのです。利休が信長と会ったのは、その頃のことでした。天正元年（1573）の朝倉攻めのときには、大量の鉄砲玉と馬を信長へ贈り、感謝されています。

ん、ということは、千宗易（利休）は、「武器商人」でもあったということなんですね。

ところで、織田信長は自分が好きだから、自分の趣味だから、名物道具を強制的に買い上げたのでしょうか？

買い上げた名物は、もともと、誰が所有していたものなのでしょう？「名物」の多くは、もともと東山殿御物（ひがしやまどのごもつ）でした。つまり、足利義政の所蔵品だったわけです。

それがなぜ、民間に出回っているのかというと、義政が手元不如意になり、どうしても新しい美術品がほしい場合に、かつての蒐集品を売って、その代金で新しいものを購入していたというわけです。

こうして世に売りに出されたものが、町人の所有品となったんですね。その意味で、東山殿御物は、足利將軍家の権威の象徴とも言える存在です。將軍権力がまだ大きかった8代將軍足利義政の時代に蒐集された権威の象徴である東山殿御物を信長自身が集め直すことによって、追放した最後の室町幕府將軍足利義昭に代わって、自分に足利將軍の権威が投影されるように考えたのでしょう。

つまり、織田信長という人は、足利將軍や室町幕府を無視・軽視したように見えますが、権威そのものを否定はしていないということがわかります。それが証拠に、足利義政しかやったことのない蘭奢待（らんじゃたい）の切り取り、という行為をまねて実行しているのです。

江後迪子さんが書かれた『信長のおもてなし』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー、2007）という本から、ピックアップしていきます。



この本は、題名の通り、信長が茶会を開いた際に、床の間に置いた軸絵の名前に始まり、炉、台子（だいし）、すべての茶道具を飾る棚）、炭入（すみいれ）、茶杓（ちゃしゃく）、さらに御膳の内容（本膳のメニュー）などを紹介しています。メニューに関していえば、現代でも、ホテルや高級レストランで披露宴や忘年会などをする際には、メニューが置かれていますよね。それと同じという感じでしょうか。

織田信長と千利休との出会いは永禄11年（1568）、堺の茶人で先輩格の今井宗久が信長の御前で薄茶を賜ったのだが、その席で千宗易がその薄茶を点てたという。この時、信長35才、宗易47才だった。

・・・天正元年（1573）11月24日、京都妙覚寺で信長の茶会が催された。招かれた客は、堺の代官松井友閑（ゆうかん）と今井宗久、山上宗二だった。この席で宗易は立前を行った。

信長が足利義昭を追放する一方、朝倉氏及び浅井氏を討って反体制を抑え、権力を手に仕掛けていた時期に行われた茶会である。この頃、信長は茶道具の鑑賞に主眼を置いていたと言われる。

もう一つは、天正2年（1574）4月、京都相国寺で行われた茶会である。この茶会が注目されるの

は、その年の3月28日に聖武天皇の遺品である名香木「蘭奢待(らんじゃたい)」の拝領を願い出て許され、1寸8分(約5.5センチ)を切り取って賜ったのである。これは足利義政以来のことで、一大事と言ってよい。信長は、いまだ宿敵武田氏がいたとはいえ、近畿及び中部を掌握し、天下統一が近いということを世間に知らしめるために願い出たと思われる。この香木「蘭奢待」は、現在でも正倉院に所蔵されていて、信長以後は徳川家康が拝領したのみである。・・・・・・・・

ここで、名香蘭奢待について、補足しておきましょう。

天正2年(1574)3月28日、信長は奈良の正倉院に出向き、蘭奢待を切り取っています。蘭奢待というのは、奈良時代に中国から伝来したと言われる香木のことで、これは正倉院に秘蔵されていて、これを切り取ったのは、当時では室町幕府第8代将軍足利義政ただ一人でした。

従って、信長が2番目ということになります。信長は足利将軍と同じことをして、将軍の権威が実質的に自分にあることをアピールしたのでしょう。

でも、「天下人」信長でも、蘭奢待はそう簡単に手に入れられるものではありませんでした。『信長公記』によると、まず、天正2年3月17日に朝廷へ蘭奢待所望の願いを出しています。朝廷では会議が開かれ、ようやく承認され、奈良東大寺へ日野輝資など2人の勅使が派遣され、蘭奢待切り取りの許可が出たという院宣をもたらしました。

そうした朝廷の動きと連動して、信長も27日には奈良多聞山城に移動します。28日には正倉院の蔵が開かれ、蘭奢待の入った長持ちが多聞山城に運ばれました。この奉行として佐久間信盛・柴田勝家・丹羽長秀などが派遣されています。そして、わずか1寸8分(約5.5cm)だけを切り取った、ということです。

### 信長は、この蘭奢待をどうしたと思いますか？

信長は堺の千宗易(利休)と今井宗及が、良い香炉を持っているからといって、惜しげもなく1袋ずつあげたのです。信長にとっては、蘭奢待を手に入れるのではなく、切り取ることに意味があったのですね。

蘭奢待は金では手に入りません。権力がないと手に入れることができないものです。たった二人しか入手できていないものですから、価値は相当高いものです。それを、堺の有力茶人二人に与えたのは、太っ腹なところを見せて、堺全体を自分の味方に引き入れようとしたのかもしれない。

こうして、千宗易(利休)が信長の茶頭(さどう、茶事を取り仕切る人)になります。『信長公記』によれば、天正3年(1575)10月、京及び堺の茶人17人を招いて、京都の妙光寺で茶会を開いて、その時の記録に「茶頭者宗易(利休)」と記録されているそうです。

残念ながら、信長は、天正10年(1582)本能寺で明智光秀による裏切りによって殺されてしまいますが、その当日も茶会を開いていました。そして、切腹した信長は東山伝来の名物茶器とともに火焰

に包まれて亡くなります。茶を愛した信長らしい最期でした。

ところで、織田信長が苦勞して手に入れたにもかかわらず堺の茶人二人に蘭奢待を譲ったということについて補足です。二人のうち一人が今井宗久という人物です。

今井宗久は、永正7年（1520）生まれで、千利休の2歳年長です。宗久は、堺ではどこの馬の骨ともわからなかった人物で、経済的なバックボーンもなかったといえます。

ところが、宗久は武野紹鷗の娘と結婚したのです。その当時、武野家はすでに名物道具をたくさん売っている豪商でした。紹鷗が今井宗久を気に入ったということは、ひとかどの茶人として認められたことを意味していますよね。しかも、堺において大富豪武野家の後ろ盾を得て会合衆のメンバーに迎えられる条件をクリアしたのです。宗久は武野家の婿になることで、ものすごく得をしたといえます。

## 豊臣秀吉

豊臣秀吉の時代になると、権威を示すための茶会が開かれるようになります。特に有名な大茶会が以下の4つです。

### ①天正12年（1584）10月15日「大坂城茶会」

これは、秀吉が茶の湯者を招いて行ったものです。招かれた人々は、松井友閑（ゆうかん）、細川幽斎、千宗易、津田宗及、今井宗久、山上宗二、高山右近、古田織部などでした。

### ②天正13年9月7日の「禁中茶会」

天皇・朝廷工作の一環として茶の湯が実行されました。関白秀吉が茶の湯を御所で開催することで、実質的に朝廷の権威者が秀吉にあるということを公家たちに示したのです。あとで、補足します。

### ③天正15年正月3日の「大坂城の関白大茶会」

これは武家対策でした。前年に大坂城で徳川家康との会見を行い、天下人となった秀吉は、そのことを明示するためにこの茶会を開いたのです。全国の大名たちに、自分の権威を見せつけたのがこの茶会だったのです。

### ④天正15年10月1日の「北野大茶湯」

これは、茶の湯政策の締めくくりの茶会でした。北野大茶湯の対象者は京都の人々だったのです。これは10日間開催される予定でしたが、なんと、たった1日で終わってしまいました。

なぜ、たった1日で終わったのでしょうか？

要するに、金がかかるからです。参加を迫られた公家たちには、迷惑な話だったのです。茶屋を構えたり、茶道具を用意したりすると、それなりの経費が必要になるからです。公家たちは皆貧乏でしたから、諸手を挙げて賛成できなかったのでしょう。

ですから、北野大茶湯への参加者のテンションは上がりず、見物客の人数も思ったほどの盛り上がりを見せなかったのでしょう。ですから、秀吉は初日のうちに、つまり賑わいのあるうちに中止したんですね。結局、尻すぼみで終わったしまったのが北野大茶湯でした。

このことは、秀吉に大きなインパクトを与えます。京都人が快く自分を受け入れてないことがわかったのです。京都人は「よそ者」に対して「キツイ」と言われることがあるようですが、今も昔もそうなのですかね？

そこで、秀吉は京都人に対する報復的な行動に出ます。なんだと思いますか？

中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』で見てください。

まず、京都の防衛のためと称して御土居を築きます。御土居と言いますのは、高さ3～6mの堤防です。底部の幅は10～20m、土手の上の幅は4～8mでした。さらに御土居の外側には3.5～8mの堀まで設けられました。この御土居を京都の町を取り巻く形で巡らしたのです。出入り口は10カ所に設けられましたが、御土居に阻まれて、京都の内外の行き来が不便となりました。……

また、寺町を形成して、地域に根ざしていた寺院を地域住民から切り離すために、二カ所に集中させます。それが寺町通と寺之内通です。そして肝心の居城は大坂に築き、京都を見張るための街を伏見に築くのです。

こんなことをするから、京都人から余計に秀吉は嫌われるんですね。若い時は私も秀吉は好きな方でしたが、朝鮮出兵をはじめ御土居を作って京都の景観を無茶苦茶にしたことは、秀吉の印象を決定的に悪くしてしまいました。

さらに続けて、

秀吉は、信長の茶の湯について「御茶湯（おんちゃのゆ）御政道」と名付けますが、むしろ、秀吉の政策こそが「御茶湯御政道」だったのです。

信長の茶の湯は、狭い茶室で行うものではなく、広間で行う堂々としたものでした。室町將軍家の広間の茶の湯だったのです。開放的な茶の湯だったのです。

茶道具も自分がほしいのではなく、味方にしたい茶人や大名、場合によっては家臣の褒美として与えています。茶道具に対しても開放的と言えるのかもしれませんが。



豊臣秀吉

4つの茶会を紹介しましたが、全く異なるシチュエーションの茶会について、[中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』](#)から紹介しますね。

1つめは、豊臣秀吉が三木城の別所長治を攻撃中（天正6年＝1578年）のことです。その戦闘の最中に津田宗久を招いて茶の湯を行っているのです。これは現在の茶会とは全く雰囲気違います。茶会を行う場所が、静かな茶室ではなく、戦場なのですから。

**現在の茶会と言えは、平穏な日に、優雅に行われるというイメージがあります。ところが、戦国時代においては、戦闘中でも時間を見つけて茶の湯を行っていたのです。**

**しかも、乙御前（おとごぜ）釜・月の絵・四十石（しじこく）の茶壺といった名物まで戦場に持参しています。今の感覚ですと、そんな貴重な茶道具を戦場に持っていったら壊れるのではないかと、心配になります。ところがそうではないのです。戦場だからこそ、茶の湯が必要なのです。**

**お城の攻略となると長期戦です。一日や二日で勝敗が決することは稀です。・・・攻める側にも兵糧攻めという戦法があります。ほんとうに長い日々を、攻める側も守る側も緊張状態で過ごすわけです。**

**しかし、人間はそれほど長くは緊張状態ではられません。精神が参ってしまいます。そこで、精神を癒すために茶の湯が必要となるのです。名物を壊したくはないけれど、それを恐れて茶の湯をしないことは精神生命に関わります。そして戦場だからと行って安物の茶道具で茶の湯を行っても癒されないのです。本当にいい物を使ってこそ精神は癒されるのでしょ。戦国武将達が名物を欲した理由の一つはここにあります。**

※乙御前（おとごぜ）釜は天正五年12月10日に、但馬国にある上月城攻略の褒美として、信長から下賜された釜のことです。

戦場で、いのちをぶつけ合う戦いの場で、精神を癒やすために茶会を開く、というのはわかります。今でも、アメリカ軍が中東などの戦場に向かう場合、必ず神父さんがついていくというのも、同じような効果を期待しているのでしょう。

ただ、高価な茶道具を戦場に持って行くというのは、ちょっと考えられません。今でいえば、何百万もするような茶碗や釜などを持って行く途中で壊したり、戦で負けたら取られたりしますから。逃げる場合でも、高価な茶道具を持って逃げるのは邪魔にしかならないと思うのですが。

でも、そう思うのは戦争のない平和な日本に暮らしているから、なんでしょうね。明日をも知れない武将たちにとっては「今」が大事。その「今」に「茶の湯を経験できたら本望」という感覚の人も結構多かったのかもしれませんが。そういう体験をさせてくれた「秀吉のために戦おう」と真剣に思ったかもしれません。

そのためには、安物ではダメなんですよ。価値のある本物でないと、人の気持ちは動きませんよね。

秀吉の茶会の紹介、2つめです。場所は内裏です。いわゆる「**禁中茶会**」と呼ばれます。

中村修也氏の『**戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々**』から引用しましょう。

**禁中茶会の企画者は天下人・豊臣秀吉でした。この年、秀吉は、3月に正二位内大臣に任じられ、さらに7月には従一位関白に昇進していました。9月には四国の長宗我部元親を降伏させ、四国平定を終え、8月には、越中の佐々成政をも降伏させています。……**

**秀吉は朝廷に対するお礼として禁中茶会を企画するんです。**

**秀吉みずから天皇に小御所で茶を点ててもてなそうというのです。管弦の宴でもなく、饗宴でもない。茶の湯で天皇をもてなすというのは前代未聞の出来事でした。**

**ただ茶を喫するというのを、文化にまで発展させてきた茶人達の努力が、自分の精進が殿上人達に認められる時が来たのです。**

天下人豊臣秀吉がまさに「豊臣」になって、関白の地位を利用して「惣無事令」をだし、日本統一を進めていたときに、禁中茶会が行われたのでした。天皇や貴族にお茶を点ててあげようということを秀吉が初めて行ったのです。

### 「禁中茶会」の時に使われた茶室は、どんなものだったのでしょうか？

なんと、**持ち運び自由の組み立て式、黄金の茶室**でした。広さは三畳敷きで、純金の板と箔を貼り、障子と畳は緋色の染色布、茶碗、茶釜など道具もすべて金づくしでした。

黄金の茶室ですか！！ なんか「成金趣味」って感じがするのですが、茶会を行った場所のことを考えると的確な判断とも思えます。

「禁中茶会」が行われた小御所は軒が深く、室内も暗かったはずですが。従って、灯火に照らされた黄金の茶室は、むしろ幽玄の美をたたえるように見えたのではないのでしょうか。

では、なぜ豊臣秀吉は「禁中茶会」をやろうとしたのでしょうか？

中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々』によれば、

天皇や公家は（武家の世界になっても）、説明のつかない「権威」が彼らには備わっていたのです。不思議なことです。飛鳥・奈良時代以降、長らく政権を担当し、国家儀礼を執行してきたことが、他の追隨を許さなかったのでしょう。

そして、京都が平安京以来、長らく都であり続けたことは、京に住む人たちに「誇り」を与え、その誇りの淵源が天皇にあったのです。

鎌倉時代以来、武家政権も、そのわけのわからない権威を、自分たちの政争の場面では利用してきました。戦国武将達も、戦争相手との和議を成立させるためには、しばしば天皇の権威を利用しました。

そのためか天皇の権威は不可侵な存在になっていたのです。

その天皇をもてなすのに「茶の湯」が選ばれたのです。

茶の湯を戦国時代の文化として、一所懸命に研鑽してきた茶人達にとって、これほど名誉なことはなかったことでしょう。

茶の湯で天皇をもてなす。この一事に対する感動は利休にとっても、何物にも代え難いものがあったはずで

す。茶人達にとって、この栄誉ある催しを企画した秀吉ほど、有り難い存在はなかったでしょう。まさに秀吉様々でした。

## おわりに

日本を代表する文化、茶の湯に関係する茶人3人と信長・秀吉を取り上げてきました。

正直に言えば、利休の2大武将弟子である**古田織部**・**細川三齋**なども取り上げたかったのですが、能力の限界です。機会があれば、取り上げていきたいです。

中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々』を読んでいて、一番印象的だったのは、「武士がなぜ茶の湯にはまるのか」ということでした。もう一度引用します。

**自分の精神を鍛え、この波乱の時代を乗り切ろうとした人々は、癒しと同時に精神の落ち着きを求めて、茶の湯をその手段としたんです。**

細かいところは割愛しますが、本当に茶の湯（禅宗も）というのは、武士にとっては必須アイテムであり、精神生命を健康にしていく上で必要不可欠なものであったのですね。

今回も、お付き合いくださり、ありがとうございます。

